

「人種などによる分断を超えたアイデンティティーを米国社会が求める中で、エルビスは登場した」と語る佐藤教授



## 文化としての「プレスリー」 日米の研究者

世界的なロックンロール・スター、エルビス・プレスリー(1935〜77年)の軌跡をふり返るシンポジウム(京都大学文学研究所主催)が京都市内で開かれた。日米の研究者が、社会や大衆文化にエルビスが与えた影響について議論した。

(渡辺達治)

エルビスは1954年の「ザッツ・オール・ライト・ママ」で脚光を浴びて以来、「ハートブレイク・ホテル」「監獄ロック」など大ヒットを連発。「ロックの王者」と呼ばれた。

シンポでは、米文学研究者の佐藤良明・放送大学教授が生い立ちに着目。米南部の小さな町で生まれたエルビスは少年期、同じ南部で

がてR&Bの感性を持つ白人歌手の先駆者として成功。「人種の壁を突き抜けた」存在となった。

また初期のエルビスの曲はR&B由来の3連ビートが特徴。これはポップス界に広まり、ソフトな形で日本の歌謡界にも取り込まれた。第一回日本レコード大賞の水原弘「黒い花びら」(59年)でも使われ、佐藤教授は曲を流して説明した。

米ペンシルベニア大の美術史学者ターニャ・ユングさんは、エルビスをモチーフにした大衆アートが著作権管理の網の目を抜けて広がるさまを紹介。米国大衆文化を象徴するアイコンとしての根強さを示した。

さらにエルビス研究者として著名なエドモンド・ウオーレン・ペリー・Jr.さんは、スターをめぐる英雄神話などの観点で解説。シンポを企画した立木康介・京大准教授は「エルビスとは何かを文化史の観点で探ることができた」と話した。

「ワークショップ「かたちと音〜図形楽譜と音楽をめぐって〜」 21日午後6時、神戸市兵庫区、神戸アートビレッジセンター(☎078・512・5500)。図形楽譜は現代音楽の記譜法で、五線紙を用いる方法と異なり、表や図などを活用する。デザイン画のような美しさが特徴だ。ピアニストで作曲家の河合拓始さんが、演奏を交えて図形楽譜の読み方を解説する。定員30人。